

〔 優秀賞 〕

草薨 未希さん（北秋田市）レビュー

書評対象図書

ジェーン・スー 著

『介護未満の父に起きたこと』（新潮新書刊）

ビジネスライクでいこう

この書の筆者ジェーン・スーはコラムニスト、そしてラジオパーソナリティをやっている言葉のプロフェッショナルだ。『貴様いつまで女子でいるつもりだ問題』では、中年女子の葛藤を愛ある言葉で愉快地ツッコみ、『女の甲冑、着たり脱いだり毎日が戦なり。』では、現代女性に応援のメッセージを届けてくれた。

そんな筆者が実の父の介護に関する本（実際は介護未満）を出版すると聞き、わくわくした。いつかやって来る親の介護。育ててくれた恩返しはしたいが楽しみではない。普段だったら介護の本を読もうとは思わないが、女性の悩みを真剣に受け止め、笑いを交えて表現する筆者が描く介護の世界に興味を湧いた。

筆者の父は82歳（2020年当時）で独居老人。59歳のときに妻に先立たれ、現在は団地住まいだ。口達者でガールフレンドがいるくらい元気だが、物忘れが激しくなっていた。それでも「なんとかなる」とうそぶいていた筆者に、その日は突然やって来た。日頃父の生活を支えていたガールフレンド（こちらも高齢とのこと）が療養のため長期離脱を余儀なくされたのだ。

心配して父の家を訪問すると、そこは汚部屋一歩手前の状態だった。これはいかんと必死に部屋を片付ける筆者をしり目に、父はテレビを見ているだけ……ここで怒り爆発（老人虐待はいけませんが特別なことではないのかもしれない）とならないように筆者は動き出した。ビジネス書を購入し、父の諸問題をビジネスタスクに見立てたのだ。そしてやることツリーやマトリクス表を作成し、筆者がやること、父がやること、外注することを明確にしたのだ。外注先を数社比較検討するあたりもビジネスライクで気持ちがいい。

それでも親子介護は難しい。親しさゆえの気持ちのぶつかり合いが起こらないように、筆者は父のケアを「終わらないフジロックフェスティバル」だと思ふことにした。父を往年のスター、ミック・ジャガーと考え、無理を言っても怒らず、うまく誘導できるようにしたのだ。肉親だからこそ一歩も二歩も引いて相手を尊重する、そういう思いやりもケアには必要だと気付かされた。

筆者は本書の中で、これまで向き合ってきた女性の諸問題と同じように、ユーモアを取り入れながら介護に挑んでいた。介護する未来に不安を抱いている人、介護される未来にちょっと向き合いたい人にはぜひ読んでもらいたい。「介護頑張ろう！」と思える一冊だ。